

タイトル:平成 25(2013)年度 教育セミナー

日時:平成 25 年 9 月 20 日(金)～23 日(月・祝)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「イスラームとグローバリゼーションズ—東南アジア海域世界から見た複数のグローバリゼーション」

床呂 郁哉(AA 研)

今回の報告ではいわゆるグローバリゼーション(globalization)の文脈のなかでイスラームをどう捉えるのか、という点について報告者のフィールドである東南アジアの事例などに基づいて考察した。

近年、文化人類学を含む人文・社会科学等のアカデミズムの分野で論じられることの多いグローバリゼーションであるが、報告者の見るところ、グローバリゼーションについて論じることには現在、特有の困難がある。その一因はグローバリゼーションをめぐる議論や論争、対立等が必ずしも自明ではない暗黙の前提をもとに議論されていることにある。本報告ではグローバリゼーションをめぐる従来の諸議論に対して、その暗黙の前提を指摘し、従来のグローバリゼーションをめぐる議論の多くは実際には本稿の用語法では「大文字のグローバリゼーション」と呼ぶ概念に依拠しており、それはグローバリゼーションをめぐる議論の可能性のありうる可能性のうちの一部にすぎないことを指摘した。ここで言う「大文字のグローバリゼーション」とは、主として時間軸上では近代以降の、そして空間軸においては欧米などを中心とした「中心—周辺」モデルを暗黙の前提とした概念である。

この従来のグローバリゼーション概念に代わる枠組みとして報告者は近年「プライマリー・グローバリゼーション」という概念を提唱してきた。この「プライマリー・グローバリゼーション」とは、近年の歴史研究等で指摘される前近代の非西欧地域において既に存在していた広域に跨るヒト、もの、文化等の移動やネットワーク、フロー状況を、現代的文脈においても持続している現象として再定義したものである。本報告はこうしてグローバリゼーションのありうる複数性や多元性に注意を喚起すると同時に、またそうした複数の異なるグローバリゼーションが、相互にどのような関係を切り結んでいるのかを、筆者のフィールドであるフィリピン南部におけるムスリム分離主義運動の展開や現地ムスリムの各種の越境的な実践を含むイスラームの動向などを題材に検証することを通じて、グローバリゼーションに関する人類学的議論の可能性を拡大することを試みた。

## 参照文献

三尾裕子・床呂郁哉編『グローバリゼーションズ』弘文堂、2012年。

床呂郁哉・西井涼子・福島康博編『東南アジアのイスラーム』東京外国語大学出版会、2012年。